

# 日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA

第226回定期演奏会


# 捧 ぐ

vol.1

2019年 1月 23日 (水)  
豊洲シビックセンター 5Fホール  
午後7時開演 (6時30分開場)

■主催 特定非営利活動法人 日本音楽集団

■後援  公益財団法人 日本伝統文化振興財団  
JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION

■助成  文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人 日本芸術文化振興会

演出: 田野村 聡  
構成: 藤高理恵子  
舞台監督: 中島隆

古来より、芸術は「捧ぐ」ことと共に発展してきました。  
畏怖、敬意、羨望…あるいは、大いなる慈しみの心によって。

今回は「捧ぐ」をキーワードに選りすぐった作品群を演奏いたします。

この日、この時間、この場でのみ構築される一時の『場』を  
演奏者と共有して頂ければ幸いです。ご来場、誠に感謝いたします。

第226回定期演奏会 実行委員



## 1. セレモニアル・スペース

(2001年／一柳慧 作曲)

[龍笛] あかる 潤 [笙] 三浦 礼美(助演) [箏] 三浦 元則 [尺八] 田野村 聡  
[箏] 桜井 智永 [二十絃] 久本 桂子 [打楽器] 多田 恵子

私は日本の伝統芸術に見られる様式をもった所作が好きだ。お茶を点じたり、花を活けたりする時の所作、あるいは能や聲明などに見られるさまざまな型をもった動作、これらが質感を伴ったとき、そこに比類のない様式美が立ち顕われる。

「セレモニアル・スペース」は、そのようなイメージを、現代の観点から音楽的表現に結びつけられないだろうか、ということから発想した。もとより、長い年月にわたって培われてきたものとは比ぶべくもないが、私自身の問題として、このことが少しでも音楽を考える上でプラスになれば、という思いもあった。

曲は基本的に合奏曲であるが、それぞれの奏者に、ソリストィックな所作もとりこまれている。また、伝統芸術の特質である音楽における空間性をここでも顕在化する上で、時間の束縛からの解放を意図したセンザ・テンポの個所を、随所に設けている。

(2001年11月22日、第165回定期演奏会プログラムより、作曲者)



## 2. 火の曲

(2004年／四反田素幸 作曲)

[龍笛Ⅰ] 竹井 誠 [龍笛Ⅱ] あかる 潤  
[箏Ⅰ] 熊沢 栄利子 [箏Ⅱ] 石田 真奈美(助演) [箏Ⅲ] 桜井 智永 [箏Ⅳ] 石井 香奈  
[十七絃Ⅰ] 久本 桂子 [十七絃Ⅱ] 丸岡 映美 [打楽器Ⅰ] 山内 利一 [打楽器Ⅱ] 盧 慶順  
[指揮] 苫米地 英一

古来より儀式や祭礼などにおいては、火は神聖なるものの象徴的意味合いを持って用いられてきた。オリンピックの聖火などはその典型であろうが、私がこの作品で意図したことは、ゆらゆらと静かに、あるいは激しく燃え盛る炎によって呼び起こされる様々な情感の揺らぎ、即ち時に祈りのような純化した平穏な心の状態であり、また時にはデモーニッシュでさえあるような躍動する心象風景を、儀式的に演出された演奏空間の中に描き出すことであった。故に舞台上の楽器配置(笛を中心として、両サイドに箏群が広がっていく配置)は、音響的な理由に加えて、その意図を視覚的にも反映させようと試みたものである。2004年の夏に作曲。

(2005年1月25日、第178回定期演奏会プログラムより、作曲者)



### 3. 受容と変容

(委嘱初演／秋岸寛久 作曲)

[笛] 新保 有生 [尺八Ⅰ] 米澤 浩 [尺八Ⅱ] 渡辺 淳  
 [三味線Ⅰ] 守 啓伊子 [三味線Ⅱ] 長井 麻江  
 [二十絃Ⅰ] 熊沢 栄利子 [二十絃Ⅱ] 桜井 智永 [十七絃] 久本 桂子  
 [打楽器Ⅰ] 尾崎 太一 [打楽器Ⅱ] 多田 恵子  
 [指揮] 田中 元樹

人は社会の中でたくさんの刺激を受けながら生活しています。得た情報を吸収、消化、熟成したのち、自分のフィルターを透過して発信し、また外部に影響を与えていく。まわりとの関わりが存在の証であって、自分の意識を形成するために影響を与えてくれた人、物、ことがらに感謝の意を表すことが「捧ぐ」に通じるのではないかと考えました。多少強引な展開でしょうか。そんな気持ちからつけたタイトルが曲にどう反映しているのかを説明すると、もっと強引なことになりそうですね。外部から得たものが蓄積し、醸成しなければ音楽は生まれてこないような気がします。つまり「受容と変容」は具体的な何かを示したタイトルではありません。なんのこだわりもなく、お楽しみいただけると思います。

(作曲家)

● ● ● ● ● 休 憩 ● ● ● ● ●



### 4. 二十絃箏鎮魂協奏曲

#### コンチェルト・レクイエム

(1981年／三木稔 作曲)

[二十絃 独奏] 三宅 礼子

[笛Ⅰ] 竹井 誠 [笛Ⅱ] 新保 有生  
 [尺八Ⅰ] 米澤 浩 [尺八Ⅱ] 阪口 夕山 [尺八Ⅲ] 田野村 聡  
 [尺八Ⅳ] 元永 拓 [尺八Ⅴ] 原郷 隆 [尺八Ⅵ] 渡辺 淳  
 [太棹三味線] 山崎 千鶴子 [琵琶] 藤高 理恵子 [胡弓] 帯名 久仁子(助演)  
 [二十絃Ⅰ] 久本 桂子 [二十絃Ⅱ] 渡辺 正子 [十七絃Ⅰ] 丸岡 映美 [十七絃Ⅱ] 石井 香奈  
 [小鼓] 尾崎 太一 [大鼓] 盧 慶順 [締太鼓] 多田 恵子 [樂太鼓] 山内 利一  
 [指揮] 稲田 康

声楽を伴わない単一楽章で書かれたレクイエムです。特定の宗教儀式とはつながっていませんが、人が必ず迎える厳しい死を泣き、魂の鎮まることを願って作曲されました。死んだ人間が土に返るといふ古い考えに従って石のビートがセレモニーを導きます。

二十絃箏は作曲者が最も力を入れて育ててきた楽器で、その上演様式として重要なコンチェルトに、レクイエムの内容を持たせることにより最も深い心の表明をしようとしたものです。

初演は1981年第64回定期演奏会、編成は、独奏二十絃箏、笛1または2、尺八3または6、琵琶、太棹三味線、胡弓、二十絃箏2、十七絃2、打楽器4、演奏時間は約20分です。

(1994年11月17日、第136回定期演奏会プログラムより)



